


 卷 頭 言
 

## 「美しい加速器づくり」を


 西川 哲治  
 Tetsuji NISHIKAWA

私の父は、実験物理学者であったが、能楽や狂言の観賞が好きであった。

そんな事もあってか、少年時代、何回か、私を能楽の観賞に連れて行ってくれた。確か喜多流の能楽堂が出来た頃であったと思う。当時、喜多流十四世の家元喜多六平太は、日本の伝統芸能の復興に尽力し、後に文化勲章を受章された。

言うまでもなく能や狂言は、日本古来から伝わる伝統的な文化である。しかし、父と共に能楽を観賞した当時、私には、能楽そのものもつ幽玄さを本当には、よく理解できたわけではなく、むしろ、合間に入る狂言の方が面白かった記憶がある。

この十月の毎日新聞の夕刊に、「この人、この時」というインタビュー記事が連載された。その中で、今日のこの道の代表的な狂言師、野村万作氏が、「芸を極める」という題で、4回にわたって、過ぎてきた年月をふり返り、自分の芸に対する思いを語っていた。

その最終回で、野村氏は、「狂言の演者として、身体は重心が低く、足腰が強く、姿勢良く、言葉は美しく、大きく、はっきりと、観客を包みこみながらやるのだが、これでもか、これでもかというのではなく、それらすべてをふくめて、優しく、柔らかく、静かに演じたい。それが命、それが芸を極める境地だ。」と述べていたが、私はこの言葉に深く共感を覚えた。

ところで、私は、喜多六平太が亡くなった1971年に、東京大学から高エネルギー研究所に移り、以来、加速器科学の研究に専心して、40年を過ごした。

一般に加速器は、そのエネルギーや強度や性能で評価されており、日本の加速器は、今や、世界一のエネルギー、世界一の強度をもつようになった。そして、素粒子や原子核の研究に限らず、非常に広範な分野の研究や応用に貢献している。当然のことながら、科学の研究の最先端をいくものと評価されている。

しかし、私自身は、最近、改めて、実は加速器科学の評価は、その表面に表われた成果だけではない。別の観点の評価が、これからは必要であるのではないかと思っている。むしろ、加速器の美しさや深さというようなものを探していくことが必要になるのではないだろうか。いわば、ここにも、芸術的な美しいものや、美しいことを、美しい心で、美しく作り、美しく使う人間性が反映されるべきではないか。エネルギーや、強度や、性能などでも、名声や利潤を追うだけでなく、自然の真理を、極めつくす努力を、静かにゆっくりと演じたい。というのが最近の私の境地である。

最後に、このような美しい加速器づくりは、あたかも、シンフォニーオーケストラで、多数の演奏者の一人一人が、現実の自分の能力を肯定し、共に一つの音楽を奏できるように、多くの科学者や技術者が、自分の現実の立場を肯定し、力を合わせて、初めて可能になるであろうと確信している。